

令和2年度教育事業
そにっとキャンプ
～出会いのキャンプ～



1. ねらい

- ・新しい仲間と出会い、親交をもつ。
- ・みんなで協力する気持ちを培う。
- ・やり遂げることの喜びを感じる。
- ・自然（光、風、水、草木）を体感する。

2. 実施日

7月23日(木・祝) 日帰り

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生

4. 参加者 / 募集定員

11名 / 12名

5. プログラム (要約)

「そにっと」のキャラクターを活用した、ストーリーキャンプを行った。活動全体においては絵カードや「そにっと」からのメッセージ動画を用い、活動の流れを子どもたちに示し、見通しをもって活動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」により具体的な行動を示し、キャンプリーダーのサポートを受けながら初めて出会う仲間と協力し、スモールステップで達成感を積み重ねた。

スケジュール

7月23日(木・祝)

「はじまりの式」

「アイスブレイク・作戦会議」

「館内そにっとウォークラリー」

「火おこし体験等」

「ふりかえり」

「むすびの式」



「チームそにっと」として、国立曽爾青少年自然の家に集まった11人の参加者は、はじまりの式の後、「おちたおちた」や「となりのとなり」などのゲームを仲間やキャンプリーダーとともに楽しんだ。

その後、「そにっと」からミッションが伝えられ、班ごとに館内を巡り暗号を解いていく「そにっとウォークラリー」に出かけた。班の仲間と一緒に、クイズの答えを探しながら、キャンプリーダーや友だちとの関わりを深めていった。途中には、宿泊棟に入ってベッドメイキングをするミッションなどもあり、楽しみながら施設を知ることができた。

暗号を解読してゴールにたどり着くと、「そにっと」から次のミッションが伝えられ、参加者は野外炊飯場へと向かった。野外炊事場でのミッションは、「火起こし」。キャンプリーダーから注意事項を聞いた後、グループごとに挑戦した。「節のない薪の方が割りやすいよ。」「この葉っぱ入れたらよく燃えるみたい。」「ライター貸してくれる？」など火をつけるというミッション達成のために、声を掛け合う姿や手伝う姿が多く見られ、参加者同士の関わりもだんだんと増えていった。全ての班の薪に火が着き、満足そうに炎を眺める参加者たち。最後はその火を使って空き缶で作るポップコーンにも挑戦し、出来上がったポップコーンをみんなが笑顔で頬張っていた。



6. まとめ

本年度の出会いのキャンプは、新型コロナウイルス感染症の状況等を踏まえ、当初の日程を延期し、日帰りの事業に変更して実施した。前日には参加者の健康状態を電話で確認し、当日は、事前に配布したチェックシートを提出してもらい、当日の健康状態を確認するなど、感染防止に努めながら実施した。そんな中、参加者は、一つひとつの「ミッション」を達成していく過程で、固かった表情がほぐれていき、だんだんと班の仲間やリーダーとの会話や笑顔が増えていった。

自分の思いが上手く言葉で表現できなかつたり、相手に伝わらなかつたりしたときに、班から離れてしまうことや感情のコントロールができない場面もあったが、キャンプリーダーやスタッフが、子どもたちに寄り添って見守り、話を聞くことで、班での活動に戻れるようになり、短い時間の中でもまとまりが徐々に出来上がっていく様子を感じられた。次回の「冒険のキャンプ」でも、さまざまな「ミッション」をみんなで乗り越え、達成感が味わえるように、プログラムを進めたい。

(主任企画指導専門職 曾和 良友)

令和2年度教育事業 そにっとキャンプ 冒険のキャンプ

1. ねらい

- ・ 冒険的なプログラムをやり遂げることで達成感をもつ。
- ・ 協力することの大切さを実感させ、社会性を養う。
- ・ 成功体験を積み重ねる中で、自己肯定感を養う。
- ・ 保護者の交流と子育てについての意見交流をはかる。

2. 実施日

9月19日(土)～9月21日(月・祝) 2泊3日

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生
及びその保護者

4. 参加者 / 募集定員

12名 / 12名 保護者13名

5. プログラム(要約)

全3回の第2弾として、親子での2泊3日の冒険のキャンプを実施した。子どもたちは山・水の冒険に挑戦し、保護者はワークショップや野外炊事など、親子別のプログラムとした。

出会いのキャンプ同様に「そにっと」のキャラクターを活用し、ミッションが与えられるストーリーキャンプとした。活動全体においては手順カードを用い、子どもたちに各プログラムの流れを事前に提示し、見通しをもって行動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」により好ましい行動を具体的に示し、達成感を味わうことができるようにした。

キャンプのスケジュール

【子どもプログラム】

9月19日(土) 1日目

「はじまりの式」「山の冒険(後古光山登山)」「マイスプーン作り」「ふりかえり」

9月20日(日) 2日目

「水の冒険(カヌー体験)」「アスレチック」「ロープスライダー」「キャンプファイアー」「ふりかえり」

9月21日(月・祝) 3日目

「野外炊事(保護者においしいカレーを作ろう)」「3日間のふりかえり」「むすびの式」

【保護者プログラム】

9月19日(土) 1日目

「はじまりの式」「ワークショップ①・②」
「野外炊事(子どもたちへ夕食を)」

9月20日(日) 2日目

「講義①・②」「水の冒険見学」「カヌー体験」
「ワークショップ③・④」「キャンプファイアー」

9月21日(月・祝) 3日目

「ワークショップ⑤」「3日間のふりかえり」
「むすびの式」

9月19日(土)

<子どもプログラム>

「そにっと」に招待され約2ヶ月ぶりに自然の家へ戻ってきた子どもたちは、再会を喜ぶとともに新たなミッションに期待を膨らませ、はじまりの式を迎えた。

「そにっと」から最初のミッションである「山の冒険」に挑戦する指示が与えられると、参加者はマイクロバスに乗り、後古光山

(892m)へ向けて出発した。途中、ロープが張られた岩場が現れると、参加者はロープをぎゅっと握り慎重に登り始めた。参加者やリーダーからは、「そこに足をかけるといいよ。」「がんばれー!あと少し」など、励ましの言葉や優しい言葉がたくさん飛び交い、全員が無事山頂にたどり着くことができた。



体験の後、自然の家に戻ると、保護者が作ったちゃんこ鍋と子どもたちへのメッセージが準備してあり、子どもたちは、うれしそうに食べていた。夜には、自分の分と3日目のカレー作りの時にサプライズでおうちの人にプレゼントする分のスプーン作りに挑戦した。全員、おうちの人に喜んでもらおうと一生懸命取り組むことができた。

<保護者プログラム>

地球元気村自然学校校長の奥田博氏を講師として、プログラムを進めた。アイスブレイクでは、それぞれが自分の趣味や好きなことを話す時間があり、打ち解けやすい雰囲気ができた。その後、子どもたちの夕食としてちゃんこ鍋を作りながら、保護者同士の交流を深めた。夕食後は奥田氏の主導による発達に特性のある子どもたちの特徴や行動原理、その対応などについて講義が行われた。

9月20日(日)

<子どもプログラム>

「水の冒険」として、「平成榛原子供のもり公園」に移動し、午前中は、二人乗りカヌーに挑戦した。初めての挑戦に最初はドキドキしている様子であったが、リーダーや施設の方のアドバイスで、すぐに操作にも慣れ、一緒に乗るリーダーと息を合わせてすいすいと、とても気持ちよさそうに進んでいた。公園では、他にも班ごとにアスレチックやロープスライダーに挑戦した。昼食後は、広場に移動し、全員で遊んだ。「みんなでおにごっこしよう」「次は、キックベースしたい」一人の呼びかけにみんなが応え、汗だくになりながら元気いっぱい遊び、他の班の子と交流を深めることができた。



<保護者プログラム>

曾爾村立曾爾小中学校長の吉田昌功氏を講師として迎え、子どもたちの認知や行動の分析についての講義が行われた。子どもたちの行動の裏にある「見えない部分」を見抜こうとする考え方について、保護者も熱心に聞いていた。昼食後はカヌー体験をした。子どもたちがチャレンジしたことを体験することで、より一層子どもたちの頑張りに共感できたようである。その後は、奥田氏により適応規制とジレンマについての講義があった。

<子ども・保護者 合同プログラム>

キャンプファイヤーでは、リーダーが進行するゲームや歌で盛り上がり、歓声が響いた。最後に保護者から我が子に向けて、二日間で芽生えた思いを伝えた。



その言葉は、どれも子を思う愛情に満ちていて、子どもたちは、照れくさそうにしながらもしっかりとその思いを受け止めている様子が窺えた。

9月21日(月・祝)

<子どもプログラム>

子どもたちは最後のミッションとして、「保護者においておいしいカレーをふるまう」ことに挑戦した。「出会いのキャンプ」での薪割りや火起こし体験を活かして、作業に取り組んだ。

出来上がったカレーを食べてもらうためテーブルにセットし、笑顔いっぱい保護者を誘いに行く子どもたちの微笑ましい姿が見られた。テーブルには、子ど

もたちが保護者に当てて書いた手紙と1日目の夜に作ったスプーンが添えられており、それを見た保護者は、思わぬプレゼントに対する驚きの表情が見られた。そしておいしくできたカレーに自然と笑顔がこぼれた。

後片付けを終え、ふりかえりをリーダーと共有した後、カードに互いの名前やメッセージを書き合い、「旅立ちのキャンプ」での再会を約束し合い帰路に就いた。解散後、キャンプの期間中、離れて過ごした我が子と会話を交わす保護者のうれしそうな笑顔が印象的であった。



<保護者プログラム>

奥田氏より、過去のそととキャンプ参加者の現在の姿や、保護者の活動の様子について、スライドショーを交えながら紹介があった。その後、昼食のカレーが出来上がり、子どもたちに迎えられた保護者は、3日間の活動を一緒に振り返りながら楽しそうに食事をしていた。食後、保護者は、子どもたちがキャンプの振り返りをしている時間に、班についていたリーダーから、3日間のそれぞれの子どもたちの様子や頑張っていたところを聞いた。話の中に普段一緒に過ごす中では見られない姿がたくさんあったようで、驚きや感動とともに話を聞いていた。

6. まとめ

今回は3回シリーズの2回目で、3日間のメインキャンプとなる。昨年度まで1泊2日で行っていた出会いのキャンプが、本年度は日帰りであったため、泊を伴う今回の冒険のキャンプでは、当初参加者の不安や戸惑いも感じられた。しかし、森・水の冒険・野外炊事など一つ一つのミッションをクリアしていく中で自信をつけていき、挑戦する気持ちも強くなっていった。また子どもたち同士の声かけや関わりが増え、仲間意識が高まった姿が印象的であった。

今回は、保護者も参加し、親子並列型のキャンプとした。親子が別々のプログラムに取り組むことで、保護者にとっては、我が子との関係を見つめ直し、親子の絆を深める機会になった。また、保護者同士で、ワークショップや野外炊事など協働することで、子どもたち同様につながりも深まり、今後も情報交換や交流を深めていくという意識を高めていた。

12月に実施する「旅立ちのキャンプ」では子どもたちのさらなる成長を期待したい。

(企画指導専門職 曾和 良友)

令和2年度教育事業 そにとキャンプ 旅立ちのキャンプ



1. ねらい

- ・ 体験を通して得たもの、感じたこと（進歩したこと）を再確認する。
- ・ 仲間との再会を喜び合う。
- ・ 冒険のキャンプでの体験をふりかえり、自己肯定感の再構築を行うとともに新たな目標をもつ。

2. 実施日

12月12日（土）～13日（日）

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生

4. 参加者 / 募集定員

11名 / 12名

5. プログラム（要約）

全3回の最終回として、1泊2日のキャンプを実施した。今回もキャラクター「そにと」からミッションが与えられるストーリーキャンプを行った。活動全体においては「手順カード」を活用した。また、活動の前に「キャンプの約束」を全員で確認することにより、具体的な好ましい行動を示し、達成感を味わうことができるようにした。

キャンプのスケジュール

12月12日（土）

「はじまりの式」
「亀山ハイキング」
「そにとリンピック」



12月13日（日）

「ウォークラリー」
「野外炊事（ちゃんこ鍋）」「火おこし体験」
「そにとキャンプのふりかえり」
「むすびの式」

12月12日（土）

「はじまりの式」の後、今回もキャラクター「そにと」から「亀山ハイキング」のミッションが与えられた。当日は、強風のため、山頂まで登ることをやめ、

亀山峠までのハイキングとした。「ここで休憩しよう」「ちょっとそこで待っていてね」など、みんなで声をかけ合いながらペースを合わせて進むことができた。

亀山峠に着いた参加者は、班ごとに楽しかった思い出の一つを大きな声で叫び、麓まで声を届けることができた。夜には「そにとリンピック」を行った。班ごとにだるまさんが転んだや、風船遊び、ペットボトルボウリングを楽しんだ後、参加者で相談し、全員でケイドロを行った。ボランティアや職員も参加し、汗ばむほど目一杯身体を動かして楽しむことができた。



12月13日（日）

ウォークラリーで館内外を巡りながら、これまでのキャンプを振り返るクイズに挑戦した後、「野外炊事（ちゃんこ鍋）」に取り組んだ。一人一人ゴム手袋をつけ、密を避けるために交代で食材を洗ったり切ったりするなど、十分配慮しながらの活動であったが、前回のキャンプでの経験を活かして、協力して進めることができていた。また、空き時間を利用して火おこしにも挑戦し、食後のデザートにマシュマロやさつまいもを焼いて食べることができた。

午後からは、「そにとキャンプのふりかえり」を行った。大きな紙に貼付された写真を見ながら、全3回のキャンプのふりかえりを行い、最後は全員がそにとキャンプでの一番の思い出とこれからの目標を発表した。むすびの式では、「そにとキャンプ修了証」とリーダーからのプレゼントが手渡され、それを手にした参加者は、笑顔で自然の家を後にした。



6. まとめ

今回のキャンプも、マスク着用や換気、手指消毒の徹底など、新型コロナウイルス感染症に対して対策を講じた上での活動となった。「新しい生活様式」でのキャンプとなったが、参加者は、回を追う毎に約束を守って行動するようになり、仲間とのつながりを深めていった。このことでコロナ禍における「そにとキャンプ」の意義を改めて感じる事ができた。

そにとキャンプに参加したことで、参加者同士がつながり、保護者同士がつながっていく。このようなつながりを継続できるよう、自然の家としてこれからも支援していきたい。

（主任企画指導専門職 曾和 良友）